第43回 全国中学生人権作文コンテスト

長崎県大会作品集

長崎地方法務局
長崎県人権擁護委員連合会

「鳥」「自由と解放」を表わしたもの

小　木　太　法　書
オタビオ・ロス　画

世界人権宣言とは……

（一九四八年十二月十日
国際連合第三回総会において採択）

第二次世界大戦は、五、六〇〇万人を超える犠牲者を出した悲惨な戦争でした。

この厳粛な経験から、二度と戦争を起こさないためには、全世界で基本的人権が確立されていなければならない、ということが理解されました。

そこで、世界各国の人々及び国が達成すべき基本的人権の基準を宣言したのが、「世界人権宣言」です。

世界人権宣言の基本にあるのは、全ての人間は生まれながらにして自由であり平等である、という信念です。

そして、基本的人権は、いかなる差別を受けることなく享有できなければならない、と宣言しています。

「第43回全国中学生人権作文コンテスト　長崎県大会表彰式」　　令和６年12月７日　於　長崎原爆資料館

はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための人権啓発活動の一環として、昭和五六年度から毎年全国の中学生を対象に、「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、これを受けて、長崎地方法務局と長崎県人権擁護委員連合会では、同コンテストの長崎県大会を実施しています。

このコンテストは、次代を担っていく中学生の皆さんが、日常の家庭生活や学校生活等の中で起こった出来事など、自らの体験を踏まえて、人権について考え、作文を書くことによって、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けていただくことを目的として実施しており、今回で四三回目を迎えました。

本年度は、長崎県内の全中学校の八二・一％に当たる一四七校から、一五、八八八編にも及ぶ多数の作文が寄せられました。これもひとえに、長崎県教育委員会を始め、御指導に当たられた先生方や保護者の皆様の人権問題に対する深い御理解と、生徒の皆さんの熱意の表れであり、深く感謝申し上げます。

応募作品には、「障がい」や「多様性」をテーマにしたものが多くありました。また、中学生にとって身近であり、かつ重大な人権問題として意識される「いじめ」や「誹謗中傷」について書かれた作品もあり、いずれの作品についても、自身の体験や日常の生活の中から、あるいは、自分で調査したテーマから人権

問題について思ったことや感じたことを純粋な感性で表現するとともに、真剣に、かつ明るく前向きな考え方が示されており、感動を与えてくれるものばかりでした。

この作品集を一人でも多くの方々に読んでいただき、思いやりの輪が更に広がり、明るく住みよい社会づくりの一助となることを願っています。

終わりに、本コンテストの実施に当たり御後援を賜りました長崎県教育委員会、株式会社長崎新聞社、日本放送協会長崎放送局、長崎放送株式会社、株式会社テレビ長崎、長崎文化放送株式会社、株式会社長崎国際テレビ、株式会社エフエム長崎及び長崎県校長会並びに御協力を賜りました各市町教育委員会、中学校等各関係機関及び審査員の方々に対し、心から御礼申し上げます。

令和六年一二月

長崎地方法務局長　中嶋武彦

長崎県人権擁護委員連合会長　有田洋史

目次

最優秀賞

長崎地方法務局長賞

◆飛び込み台に立つ……長崎市立淵中学校　二年　神門　みなみ……9

長崎県人権擁護委員連合会長賞

◆チャレンジャー……佐世保市立相浦中学校　一年　中山　彰乃……13

優秀賞

長崎県教育委員会教育長賞

◆普通とは誰が決めるの？……島原市立第一中学校　三年　吉田　ななみ……16

ＮＨＫ長崎放送局賞

◆「私にとって最高のお兄ちゃん」……松浦市立今福中学校　一年　田中　愛琉……19

NBC長崎放送賞

◆「弟」……佐世保市立清水中学校　一年　高稲　咲夏……23

KTNテレビ長崎賞

◆私たちが生きる世界を作るのは……雲仙市立愛野中学校　三年　林田　恋実……27

NCC長崎文化放送賞

◆幸せに生きる……壱岐市立石田中学校　二年　田中　海凪……30

NIB長崎国際テレビ賞

◆魔法の耳と生きる……島原市立第一中学校　三年　森田　菜々子……33

エフエム長崎賞

◆「祖母が身体障害者になって気付かされたこと」
南島原市立有家中学校　一年　田中　きいら……36

奨励賞

◆自分と向き合うことの大切さ……佐世保市立山澄中学校　三年　前田彩葉……39
◆言葉に対する責任を……長与町立高田中学校　三年　村上貴哉……42
◆公平な社会を目指して……五島市立翁頭中学校　三年　餌網代祥子……46

入賞作品一覧

……50

講評

……51

「第四十三回全国中学生人権作文コンテスト
長崎県大会」作品集

最優秀賞

長崎地方法務局長賞（中央大会推薦）

飛び込み台に立つ

長崎市立淵中学校　二年　神門　みなみ

水泳をやめた。三歳から始め、十四歳まで続けた水泳は、私にとってかけがえのないものだった。練習はきつかったが、コーチが熱心に指導してくださること、泳げる距離が増えていったこと、タイムが縮んだこと、いろんなことが嬉しくて、チームメイトと励まし合いながら頑張ってきた。夢中になって泳いだ。水泳は私の心と体を強くし、自信を与えてくれた。

しかし、私の通っていたスイミングスクールは老朽化で閉館となり、別のスクールに通うことになった。それから一年で私は水泳をやめた。いじめが原因だった。レーンをふさいでじゃまをする、わざとぶつかる、心無い言葉、陰口、無視。写真の中の私が消されていることもあった。一部の人のやることと思っても、心は深く傷つき、「私はいらない存在なんだ。」毎日が辛かった。水泳が大好きなのに、行くのが怖くて仕方なかった。悔しくて、悲しくて、泣きながら泳いだ。自分は一人ぼっちで、無力な存在に感じた。次第に体調を崩し、高熱や腹痛が続いた。それでも水泳をやめることができなかった。これまで続けてき

たし、自分が自分でなくなるのではないかと不安だった。努力して結果が出たときの達成感は忘れられない。やめたら、これまでの努力が全て水の泡になる。やめたら、自分には価値がない。そんな思いで頭がいっぱいだった。しかし体は正直で、タイムは落ちていった。食欲もない。動けないほどの腹痛や高熱が続く。私はどん底にいた。

「やめていいんだよ」

ある日、母が言った。何だかホッとした。

「水泳をやめても、他のことを頑張ればいいんだから。」

涙が溢れた。家族は私の話を聞き、勇気づけてくれた。担任の先生は、「大丈夫。」といつも私の心と体を気づかってくださった。

「元気ないんじゃない。」

学校の友達もたくさん声をかけ、励ましてくれた。家族や先生、友達からの温かい支えのおかげで、少しずつ立ち直ることができた。

いじめられたことは、私にとって辛く悲しいことだったが、その経験から大切なことを学ぶことができた。

一つ目は、助けを求めることである。いじめられているときは自信を失い、怖くて一人で抱えこんでしまう。私も一人だと思いこんでいた。しかし、ありのままの私を認め、支えてくださる人の存在に気づく

ことができた。周りに頼る勇気を持つことが、前に進むことにつながると学ぶことができた。

二つ目は、いじめを絶対に許してはいけないということである。いじめは人の心を傷つけて、自分らしく生きる権利を奪うものだ。いじめはだめ、命は大切ということは、誰もがわかっていることなのに、なぜいじめはなくならないのだろう。それは、みんな一人になりたくないからだと思う。一人になるのは怖い。だから別の『一人』を作って安心したいのだろう。いじめをなくし、誰もが安心して過ごせる社会をつくるために、私は『一人』を作らないようにしたい。一人でいる人、みんなといても孤独を感じている人に気付けるようになりたい。それがいじめを許さないことにつながると信じて、行動していきたい。

そして三つ目は、言葉の大切さだ。私は、たくさんの心無い言葉に傷ついた。しかし、「大丈夫。」という、たった一言で勇気づけられた。心に寄り添うこの一言が、私を救ってくれた魔法の言葉だ。私は、周りにこのような言葉かけができていただろうか。自分は今、傷ついていないか。周りに傷ついている人はいないか。これまでは、そんな自分に気づかないふりをしていた。周りの傷ついている人に、どんな言葉をかけたらいいのかと、迷うことがあった。これからは、自分も、周りの人も大切にしたい。私を救い、導いてくれた先生や友達のように、私も人の思いに寄り添えるような人になりたい。

私は水泳をやめ、一度は自信をなくしてしまった。しかし、たくさんの温かさに気づき、いじめの苦しさを乗り越えられ、今は周りの人に感謝の気持ちでいっぱいだ。辛い経験があったからこそ、これからいろんなことにチャレンジしたいと考えられるようになった。自分らしく輝けるように、失敗を恐れず、挑

戦したい。みんながお互いの挑戦を認め合えたら、誰もが輝ける社会が実現できると思う。水泳で得た強さと、いじめから学んだことを大切に、いじめのない笑顔あふれる明るい未来を目指して、これからも新しい世界へ飛び込んでいきたい。私は今、飛び込み台に立っている。

最優秀賞

長崎県人権擁護委員連合会長賞（中央大会推薦）

チャレンジャー

佐世保市立相浦中学校　一年　中山彰乃

私には、小学四年生の双子の弟がいます。そのうちの一人は「脳性まひ」という病気を持っています。脳性まひとは、何らかの原因（未熟児や仮死など）で出産前後に脳の一部に傷がついたための後遺症です。脳には生活するうえで必要な神経がたくさんあります。だから傷ついた場所によって、できないことがそれぞれ違ってきます。私の弟は、二十八週の時に胎盤剥離による緊急帝王切開で仮死状態で生まれてきました。運動神経を司る脳と言語を司る脳を損傷したため、全介助の重度脳性まひになりました。

この話を聞いて、

「大変そうだな。」

「可哀相だな。」

と感じる人もいるかもしれません。確かに大変なことはたくさんあります。

例えば身近なことでいうと、大きくなるにつれてだっこをするのが大変になったり、喋ることができな

いので弟が伝えたいことが分かりにくかったりします。でもそれは、ずっと一緒にいるので弟の表情や声、泣き方や笑い方などでなんとなく分かってきます。だっこは、二人で抱えたり福祉サービスのデイや訪問看護を利用してたくさんの人に関わってもらい協力を得ています。

それよりも不便だなと思うことは、車椅子マークの駐車場のすぐ後ろに設置されているポールです。あれは、お店側からすると事故防止のためだと思いますが車椅子ユーザーからすると車を完全に駐車するとトランクから車椅子が出せなくなるので、一旦中途半端に止めて車椅子を出し、止め直す必要があります。その時に後ろから車が来ると渋滞を起こすこともあります。すると、こういう事情を知らない人達からは、冷たい視線を浴びることがあるので嫌だなと思うことがあります。また、多目的トイレに赤ちゃん用のベッドしかなくおむつ替えができないことがよくあり不便だなと感じます。もっと障がいを持っている人やその家族の意見を聞いて作って欲しいなと思います。

あまり私の弟との関わりがない人達は、弟の話を聞いて

「可哀相だね。」

と、言ったりその場に居るのに居ないものとしてみることがあります。私は

「可哀相だね。」ではなく、

「頑張っているね。」と言って欲しいです。だってこれは弟や私達家族からすると当たり前の日常だからです。聞いちゃいけないと気を使うのではなく、何でも疑問に思うことは聞いて欲しいです。

これからもっと障がいを持っている人の意見を尊重した社会になって欲しいし、私も弟のことをオープンにして気軽に話してもらえるような環境を作っていきたいです。

日本では、障がいを持っている人のことを「障がい者」と言うけれど外国では、「チャレンジャー」と言うそうです。私はこれを知って、障がい者という言い方だと「がい」という文字が入っているけど、チャレンジャーだと健常な人よりもハンデがある中で頑張っているということに尊敬するような意味があるような気がしてすごくいいなと思いました。だから私もこれからは、障がいを持っている人のことをチャレンジャーと言おうと思います。

私の将来の夢は、歌のお姉さんになることです。私が小さいときに見た「お母さんといっしょ」で番組の最後の歌のときに、歌のお兄さんが私の弟よりも重度なチャレンジャーの子をだっこして連れてきていた回を一度だけ見たことがあります。チャレンジャーの子がテレビに映ったことで、この回を見た人がチャレンジャーの子も周りの人の協力があれば何でも挑戦できるということが伝わったと思うのですごく心に残りました。私が歌のお姉さんになれたらチャレンジャーの子も、もっとテレビに出られるようなテレビ番組にしたいです。そしたら、普段からチャレンジャーの子達がテレビに出ることでいろんな人がいるということが当たり前という社会になり、もっと過ごしやすくなると思います。

チャレンジャーの弟に私も負けないようにいろんなことに挑戦していこうと思います。

優秀賞

長崎県教育委員会教育長賞

「普通とは誰が決めるの？」

島原市立第一中学校　三年　吉田　ななみ

「普通の人って何だろう？」
「障がい者って何だろう？」
「普通じゃないってどういうこと？」
「普通って誰が決めるの？」

私は、このような疑問をふと考える時があります。よく身近な人達との会話の中で、「普通じゃない？」というように「普通」という言葉がよく聞かれます。そして周りの心無い人の口からは「それって障がいやろ？」「マジ障がい者やん！」などという悲しい言葉も聞こえてきます。

もしかしたら、私は「障がい」という言葉に少し敏感なのかもしれません。それは私自身が体に障がいを持っているから・・・。だからこそ私は、みんなが発する言葉に、重いものを感じてしまうのです。

私には生まれつき心臓に病気があり、小さい時に手術をしました。また私の足にはみんなと同じような指はついていません。右足と左足の大きさが違うため、履いているものが脱げないようにするために、普段は靴やシューズの中にもう一つ小さな靴を履いています。

こんな私だから、友達が話している言葉に「障がい」が入っていると、「普通じゃない」のは自分なんだ・・・と言われている気がして、どうしても胸が苦しくなります。でもそんな会話があちらこちらで聞こえてくるのが、現状ではないでしょうか？

「障がい者」って何でしょう。誰でも障がい者と言われるその体に、その心になりたくてなったわけではないはずです。もちろん私もその一人です。実際、私は「普通じゃない人」だという目で見られていると、感じる時間を過ごしてきました。身体測定や小学校のプールの時間は、裸足で授業を受けるからです。小学校までは、幼なじみも多くそこまで気にはしなかったのですが、中学校になりクラスも増えて、多くの小学校から進級してきたときに、私は不安でしかなかったです。

一番不安がピークになったのは、保体の剣道の授業でした。どうしてもみんなに足のことを言う勇気が出ない私は、シューズを履いたまま授業を受けることにしたのです。ある友人から何気なく

「何で?シューズ履いとると?」と聞かれ答える時も友達の反応が怖くて

「ちょっとけがをしているから・・・。」と嘘をついてしまいました。

本当のことを説明したい！そう思うことも何度も何度もあります。隠そう隠そうとばかりしてきたわけ

ではありませんでしたが、年を重ねるにつれて、どうしても

「みんなは私のことをどう思うのだろう」という不安が大きくなってきました。でもいつかは自分のことを分かってほしいそう思う自分もいるのです。

そして、中学二年生の剣道の授業。思い切って裸足で参加してみることにしました。周りのみんなの視線が全て自分の足に集中しているとさえ思うくらい、私の心臓は爆発しそうな鼓動を鳴らしています。

「気にしない・・・気にしない・・・」そう思いつつもみんなの視線が気になります。でも私は自分自身が一歩進めた気がしています。隠すのではなく、みんなに私を理解してほしいと思っていたことを実行できたから。

私が、これまで肌で感じてきた周囲の目。そして不安や恐怖。もしかしたら私だけでなく、他の障がいを持っている方々も感じているのではないでしょうか。十人十色という言葉がある通り、人には長所もあり短所もあります。考え方も見た目ももちろんそれぞれ違うのが当然なのです。皆さんもう少し、ほんのちょっとだけ、言葉の使い方や、声のかけ方などを考えてみませんか。人の視線や目、言葉を気にする経験をした私にとっては、どうしたら人を傷つける言葉がなくなるのか、どうしたら独りぼっちを作るような人の視線がなくなるのか、常に心にある疑問なのです。

一人一人が尊重される未来にしたいから・・・。

「普通って誰が決めるの?」この答えは今皆さんの心の中にある!今日から私を含む中学生が、人と違うことはあたりまえなのだということを、堂々と言える学校に、いや社会にしていきませんか?

優秀賞

NHK長崎放送局賞

「私にとって最高のお兄ちゃん」

松浦市立今福中学校　一年　田中愛琉

私には、障害者の兄がいます。兄は、生まれつき難聴で耳が聞こえません。身体知的発達障害があり、十七歳ですが身長は百二十センチで、知能は一歳程度です。日常生活では会話ができないため意思疎通ができません。食事、入浴、歩行など生活全般において介助が必要なので、家族の支えがなければ一人で生きていけません。兄と生活していく中で、もちろん大変なことも、我慢することもあります。ですが、兄の二コッとした笑顔が

「ありがとう」

と言ってくれているように感じ、その笑顔が可愛くて、両親を手伝い兄の介助をすることに負担を感じた事はないし、兄の存在を恥ずかしいと思ったことは一度もありません。不自由な部分は、周囲が支えてあげればいいし人と違うことは、その人の個性だと思っています。でも、現代社会は障害者に対しての差別的な言葉を平気で発してきたり、偏見の目で見られる事が沢山あります。

実際に、公共交通機関を利用した時は、周りの人が兄の顔を見てクスクス笑ったり、迷惑そうな態度をされます。車椅子に乗せて通行していると故意に通行妨害され、遠回りして目的地へ行ったり、宿泊施設を予約する時は

「障害者がいます」「車椅子です」

というワードを伝えるだけで断られたり、病院を初診で探す時も会話ができないということで嫌がられ拒否されることもあります。障害をもった兄には、

「可哀想だね」「障害者だから仕方ないもんね」「味とか痛みとか分かるの？」

と悲しい言葉をかけられます。家族に障害者がいるというだけで

「苦労ばっかりだね」「面倒じゃないの？」

と、兄の存在に困っているかのように決めつけて話されます。通常者と同じスポーツに挑戦し一生懸命頑張っていても、それをバカにしてくる人もいます。私達兄弟は、幼い頃から母に、

「強い心の人に育ってね」

と、言われ育てられました。幼い頃は理解できず、ただ頭の片隅にいつもあったその言葉ですが、成長し兄に向けられた社会の冷たさが分かってきた今、その言葉の意味を理解しました。母は、兄を産んでその社会を先に経験していたから、冷たい社会に負けずに生きてほしい、そして私がそんな社会に流されず優しい目で人を見れるようになって欲しいと願っていたのだと思います。

兄が通う支援学校には、母が願う

「優しい目を持つ人」

がたくさんいました。それは、支援学校の先生方です。生徒たちの障害は様々で、体育祭の種目は全員が同じ事をできません。先生方は、一人ひとりができる事に合わせて道具やルールの工夫をされていました。例えば玉入れでは、手が不自由な人は、紐を腕に引っ掛けてその紐を離すと玉が飛び出し玉入れのカゴに入る仕組みにされていました。文化祭の劇では、言葉を発する事ができない生徒のために、ボタンを押すだけで先生が録音してくれたセリフが流れるようになっています。セリフを言えなくても自分の力でボタンを押すことで劇に参加できたという達成感が持てるようにされていました。そして、先生方は生徒たちにずっと話しかけていました。先生の問いかけに、生徒は表情で返事をしています。その少しの表情の変化を先生は見逃さず、ずっと楽しそうな会話は続いていました。そんな先生方を見ていて、私は温かい気持ちになりました。

「障害者」

と、特別扱いせず接してくださることが嬉しかったです。

「障害がある」

と言った理由だけで起こる差別があります。

こんな現代社会に、強い悲しみを感じます。偏見の目で見たり、自分だけの考えで決めつける事は間違っ

ていると思います。障害の有無によって接し方を変えず、人格と個性を尊重しながら、共生できる社会になってほしいと私は願っています。障害があったとしても人権は、必ず一人ひとりにあり、全ての人が幸せになる権利があります。偏見や差別がなくなるように、障害者やその家族だけでなく社会全体が正しく理解していき、思いやりの心を養っていけば偏見や差別がない

「あたたかい社会」

になると思います。

優秀賞

NBC長崎放送賞

「弟」

佐世保市立清水中学校　一年　高稲咲夏

私には年の離れた弟がいる。弟は「男の子」という性別だ。だが弟の見た目は、髪が長く目がくりくりとしていて、ピンク色やかわいいキャラクターが好きなこともあり、男の子「らしい」とは見られないことも多い。

ある時、私と弟と同じエレベーターに、子供を抱えた母親が乗ってきた。するとこちらを見て「かわいらしいね、女の子かな。」とたずねられた。私は反応に困ったが「男の子です。」と答えた。エレベーターの中に気まずい空気が流れた。弟といるとこのようなことがひんぱんにあるのだ。その度に私は考えてしまう。性別なんて。と。

弟が女の子に間違えられることをどう思っているかは、私には分からない。ただ、かわいいキャラクターも好きだし、かっこいい恐竜のおもちゃも好きなのが弟なのである。弟には自由に好きなものを好きだという権利があるとだけは言える。しかし、父の意見は真逆で、「男なら男らしく」という。私のリップを弟

が興味本位で触っていると父は必ず注意してくる。「ダメダメ。そんなことしたら女になっちゃうだろう。」私は弟が女になってはいけないのか。と疑問を抱いた。ダメと否定するのは違うと思う。否定をすれば弟の個性がつぶれてしまうかもしれない。弟が自由に視野を広げて生きられないかもしれない。私は弟にそんな人生を歩んでほしくはない。そう強く感じたのだ。父は長年の性別についての固定観念がまだあるのだと思った。

今の「令和」という時代に生きていれば、自分らしく生きていけると思う。なぜそう思うのかというと、自分自身が性別について何も思わなかったからだ。ＳＮＳやネット上では心と体の性別が違う人を何人も見かけてきた。自分らしさを全面に出して素敵だなとも思うからだ。だから弟にも自分らしく生きてほしいと思うだけだった。

しかし、私の考えには矛盾があることに気づかされる。それは実際に心と体の性別が違う人を目の当たりにしたときのことだった。心に「怖い」という感情があったのだ。私は弟に自由に生きてほしいという気持ちがあるのに、ただ自分の好きな服を着て、メイクをして、おしゃれをしているだけの他人にはこういう気持ちになってしまったのだ。これが偏見ではないだろうか。

そこで、私は自分がなぜそういう気持ちになったのかを考えた。性別を間違えられる弟と何が違うのか。それは、「その人のことを知っているか、知らないか」の違いではないだろうか。人は分からないものに恐怖を抱くと聞いたことがある。その人の考え方やこれまでの人生を理解しようとすることで偏見はなくなっ

ていくのではないか。とはいえ、すぐに人のことを理解できるものではない。コミュニケーションを取ってわかり合うには時間がかかるものだ。したがって、その人にはその人の考え方があるのだと周りの人が心を広げて認める意識を持つ方が、その人自身の自由な生き方を変えるよりも、簡単に誰でもできることだと思う。

もしＳＮＳ上に弟の動画を投稿したら、少なくとも弟を否定するようなコメントがくると考えられる。それは私と同じように偏見がある人が思っているより多くいると考えられるからだ。序盤にあったエスカレーターの話でも、あの母親は悪気があって言っているのではないと思う。わざわざ性別を聞くということは弟の性別が分からなかったから知りたかった、ということだろうと思えた。それからコミュニケーションとなって弟のことを知ってもらえる第一歩なのだと感じた。

私がこの経験をして分かったことは、弟に自由に生きてほしいことを願うように、誰にでもその人が自由に生きる権利があるということ。同時に、それには周りの人の意識も重要だということが分かった。ただ単に人権があるというわけではない。私はこの体験ができたおかけで、偏見を持たれてしまう側の人権について考えることができたし、偏見を持ってしまう気持ちも理解できた。人の良さというのは様々な角度から見て見えることがあると思う。父もここでは固定観念の強い厳しそうな父だが、私は違う角度で見ると誰よりも裏で努力できる父の良さを知っている。これもまた、父を理解しているから言えることである。このような言葉がある。「certainly we can end racism with love.」これは「必ず私たちは愛で差別

を終わらせることができる」という意味である。愛とは人が人をわかり合おうと努力し続けることではないだろうか。この言葉のように、自分らしく生きる人々への偏見を、弟を想うように少しでも理解してなくしていきたいと思う。

優秀賞

KTNテレビ長崎賞

私たちが生きる世界を作るのは

雲仙市立愛野中学校　三年　林田恋実

平等とはどんなことですか。自分らしさとは何ですか。夢を叶えるために大切なことは何だと思いますか。…そのような質問に正答などはなく、毎回、自分で答えを出さなければいけないし、少し面倒だと感じることもある。その中でも、私は一学期に、強く印象に残った問いかけがある。

「『豊かさ』とはなんだろう」

七月にあった道徳の授業で、テーマとなった問い。「日本の子どもたちと発展途上国の子どもたち、どちらが幸せ、豊かだと思いますか」授業のはじめにそう聞かれて私は、少し考えたが「日本の子どもたち」と答えた。理由は、「いつも家族や友達と過ごせて、なんの心配もなく学校に行けるから」。

けれどその後、「トットちゃんとトットちゃんたち」という本の中にあるこんな文章が紹介された。「『自殺をした子は、いませんか?』『一人も、いないのです。』私は、骨が見えるくらい痩せて骸骨のようになりながらも一生懸命に歩いている子を見ながら一人で泣いた。（日本では、子どもが、自殺してるんです。）

大きい声で叫びたかった。こんな悲しいことが、あるのでしょうか。豊かさとは、なんなの？」ユニセフの親善大使黒柳さんが、発展途上国を訪れたときのことだった。

私はこの文章に衝撃を受けた。後からもう一度同じ質問をされて考えたけれど、結局、納得した答えは出せないままだった。それからしばらくして、その本を一冊全て読んでみた。そこに書かれていた、発展途上国にいる子どもたちの実態に、言葉を失いそうになるほど驚いた。戦闘中、大切なぬいぐるみに爆弾を仕掛けられ、亡くなった子。病気で亡くなった母親の側で、自分のせいだ、と自分を責めていた子。「大きくなったら、何になりたい？」と聞かれて「生きていたい」と答えた子。

世界で起きた問題や戦争について話を聞き、映像を見ることはあっても、今この瞬間に、目の当たりにすることは全くと言っていいほどない。自分や家族、身近な人が当事者でなければ、他人事だと思い、目をそむけがちになっていた。各地の内戦の話を聞いても、「遠い国のことだし、実感なんてできないし」。学校でそのような話題が出れば考えるけれど、そこで終わり。でもこの本を読んで、考え方は変わった。ニュースなどでは語られることのない、最大の人権侵害の中での子どもたちのリアルな生活。全く知らなかったその生活は、私自身の生活からは想像できないような過酷なものだった。それなのにその反対側では、子どもが自殺しているのだ。自分の無知さを知らされた気がした。もっとちゃんと知らなければ、と思った。

だけど思い返してみれば、知る機会なんて、学校や日常生活の中にたくさんあったのだ。授業、ニュース、本、人権学習、そして毎年の平和学習…。一昨年の人権学習では、聴覚障害を学ぶことを通して、相手を理解

したい、伝えたいと思うことが大切だと知った。ヘアドネーションという活動を通して、どんな社会が求められるのか考えた。今年の平和学習で高校生平和大使について調べ、社会の問題は他人事ではない、何事にも関心を持つこと・持ってもらうことが必要だとわかった。これから大切にすべきことがわかったのは、教えてもらい、知って、そして自分で考えたからだ。たくさんの経験が、それぞれの人の考え方を形作る。周りへの思いやりや心遣いも、考え方で変えられる。だから私たちは、今も変わり続けているこの世界のことを知って、よく考えることが大切だと思う。そうすれば、世界をもっと良くしていきたいという気持ちも、自然と生まれてくるのではないだろうか。そう思える人が少しずつでも増えていくことを、心から願っている。

「人間は憎しみ合うために生まれてきたのではない。愛し合うために生まれてきたのだ。」これも、「トットちゃんとトットちゃんたち」の中にあった言葉。そうだ、愛し合って、明るい世界を作るために私たちは生まれてきたのだ。周りの人への想いが、きっとより良い世界を作っていく。過去を生きていた人たちも、たくさんのことを学んできたから、今を生きる私たちに伝えてくれた。それは周りの人たち、未来の人たちを想ってくれる気持ちがあったからで、私たちがこうして学んでいけるのは過去の人たちのおかげなのだ、ということも今はわかる。

悲しい出来事や社会を揺るがす出来事は、なくならないかもしれない。だからこそ、「誰か」のことだなんて思わずに、この世界のことを学び続け、周りを想う気持ちをずっと大切にしていきたい。私たち一人一人のその想いで、私たちの生きる世界は作られるのだから。

優秀賞

NCC長崎文化放送賞

幸せに生きる

壱岐市立石田中学校　二年　田中海凪

ぼくは、パリオリンピックをテレビで見ながら、三年前の東京オリンピックの頃を思い出した。三年前、ぼくは大学病院の病室にいた。学校をほとんど欠席したことがなかったぼくは、急に病気になり、ヘリコプターで大学病院へ運ばれて六月から入院していた。その間にたくさんの先生方や患者さんと出会い病気にならないと知ることができなかった貴重な体験をさせてもらった。

夏休みに入ると、今まで静かだった大学病院が一気に騒がしくなった。検査入院で患者さんが増え、ぼくの部屋にも小学三年生の男の子が入院してきた。コロナ禍の時で、付き添いは親一人だけ許されていたのに、その男の子だけは付き添いなしでの入院だった。入院した日の夜は、消灯時間が過ぎるとしくしく泣く声が聞こえてきた。お母さんに泣きながら電話をしている声も聞こえてきて、すごく辛そうなので周りのお母さん達も心配していた。どうして付き添えなかったのだろうと不思議に思っていると、次の日からだんだんとわかってきた。その男の子は、低血糖という病気で学校でも何度も倒れてきたそうだ。だか

ら自分の事を自分でしっかり理解していくことが必要で、そのために、自分で数値を調べたり、数値や具合が悪いときは何を口にしたら良いか看護師さんと考えたりしていた。いざという時の注射の仕方も練習していた。その男の子は、病気を治すために入院するのではなくて、病気とこれからどうやって一人で付き合っていかないといけないかを学ぶために入院していたのだった。その子は明るくて、とても元気そうに見えて、そんな病気を抱えているとは想像もつかなかった。目に見えにくい病気もあって、その男の子が困っている時、ぼくは一体何をしてあげられるのかを考えさせられた。

向かいのベッドにいた高校生のお兄さんは、二度目の入院中だった。きつい治療中で髪や眉の毛はなくなっていて、初めて会った時ぼくは、驚いた顔をしてしまったのだと思う。その時、お兄さんのお母さんが元気だった頃の写真をすぐに見せてくれて、

「お兄ちゃん、前はこんな感じだったんだよ。怖くないからね。」

と笑顔で声をかけてくれた。それから少しずつ話をすることが増えて、お兄さんの受験の話を聞かせてもらった。お兄さんは行きたい高校があって、合格が難しい高校だったそうだ。一度目の入院中、治療をしながら、病院にある学習ルームで必死に勉強をし、分からない問題があった時は、病院の先生方も一緒になって考えてくださり、受験も特別に病室で受けさせてもらって見事合格したそうだ。お兄さんの「合格したい」と思う強い気持ちが、周りの人に伝わって、お兄さんの夢が叶ったのだと思う。

後から母から聞いた話だが、お兄さんは大事な手術を控えていた時、一度別の病院へ出かけていた。そ

れは、手術をすると子どもができない体になってしまうので、その前に精子を冷凍保存するためだったそうだ。お兄さんのお母さんは、将来結婚をして、子どもが欲しいと思った時に夢をあきらめさせたくないと泣きながら母に話してくれたそうだ。先のことは誰にも分からないけれど、お兄さんのお母さんは少しの可能性でも大事にしたいと思っていて、可能性があるなら決してあきらめてほしくないとぼくたちに教えてくれた。

この貴重な体験を通して改めて人権について考え直してみた。入院していた頃は、自分のことで一生懸命で気づかなかったが、今考えてみると、重い病気の人も、そうでない人も、その人が一番幸せだと思う生き方を選んで、その考えに周りの人達が理解をし、共に生きることが人権なのだと思った。

これから、ぼくに一体何ができるのかを考えてみると、相手の気持ちや考えをしっかりと聞いて理解し、自分の考えもきちんと伝えることが大切だと思った。そして、お互いが納得できる考え方や生き方を見つけることが、ぼくが幸せに生きる権利にもなり、周りの人達の幸せにもつながっていくのだと思う。

ぼくは、入院していた日のことを決して忘れはしない。あの時、出会えたみなさんに心からありがとうを伝えたい。

優秀賞

NIB長崎国際テレビ賞

魔法の耳と生きる

島原市立第一中学校　三年　森田　菜々子

「いや、何でもない。」

私が聞き取れなかったことを聞き返すと、ほとんどの人からこのような言葉が返ってくる。私は、この言葉を聞く度に、胸が締め付けられるような気持ちになる。

難聴という言葉を聞いたことのある人は多いと思う。難聴とは、音が聞こえにくい、言葉が聞き取りにくい、あるいはまったく聞こえないといった症状のある病気のことだ。私の場合は、片耳難聴という片方の耳だけ聞こえにくいという症状がある病気で、生まれつきその病気を持っていた。小さい頃は、母が、「ななちゃんは、魔法の耳を持っているんだよ」とよく言ってくれていた。私は当時、そこまで耳のことを気にせず、むしろ「魔法の耳を持っている」ということをうれしくさえ思っていたのを覚えている。あの時までは。

私が小学六年生の頃だった。授業での班活動の時間、みんなが話し合いをしている中、友達が私に話し

かけてきた。しかし、私は周りの音で友達の言葉を聞き取ることができず
「ん?どうしたの?」
と聞き返した。すると、友達は呆れた様子で、
「いや、何でもない。」
そう言ったのだ。私はその瞬間、大きなショックを受けた。今考えてみると。友達の話はそこまで大した内容ではなかったのかもしれない。でも、当時の私にとっては人間関係が壊れてしまったのではないかという不安と悲しみで胸が張り裂けそうだった。その日から私の中で耳は、「魔法の耳」ではなくなっていった。
それから何日か経ったある日、私は学校で起きたことを母に話してみた。
「つらいかもしれんけど、一度耳のことを言ってみてごらん。きっと理解してくれるはずだよ。」
母はそうアドバイスしてくれた。
翌日、母のアドバイス通り、事情を友達に話すと、
「そうやったと?ごめんね。」
と全て理解してくれた。私はその時から、病気との向き合い方を変え「不安だけど伝えてみよう。伝えるだけで、自分自身の気持ちが楽になって、人間関係も壊れずに済む。」そう考えるようになった。時には伝えてもあまり理解してくれない人もいた。そのことで落ち込んでいたとき、母の

「一度伝えてみて、理解してくれないのならそれでいい。」

という言葉に救われた。理解してくれなくてもあまり考え過ぎずに、自分自身を理解してくれる人と一緒にいればいい。自分の耳のことをしっかり受けとめて生きていくのだ。

私は、中学三年生になった今でも、病気のことが気になることがある。小学校から中学校に上がっていく中で、環境が変わり小学校が違う友達から「なんでもない」という言葉をまた聞き、気にしてしまう。けれども、前のように落ち込むのではなく、事情をすぐ伝えるようにしている。考え方を変え、向き合い方を変えれば、良い方向に進んでいくからだ。そう教えてくれた母に、とても感謝している。

世の中には、身体的にも大きなハンディキャップをもって生まれてきた方が、たくさんいる。でも、私は耳のことをハンデだとは思っていない。大事な「魔法の耳」なのだ。私と同じように、「魔法の手」「魔法の体」をもっている方たちがいる。

私は、将来このような方たちの役に立てる職業に就きたい。彼らがいかに、周囲の人との関係に悩んでいるかが、私には痛いほど分かるから。私の「魔法の耳」を生かして、さまざまな人の立場になって考え、一人でも多くの苦しんでいる人を救ってあげたい。私の母がしてくれたように。

優秀賞

エフエム長崎賞

「祖母が身体障害者になって気付かされたこと」

南島原市立有家中学校　一年　田　中　きいら

私の祖母は身体障害者です。この春に交通事故に遭って、右耳の聴力を失ってしまいました。元々左耳が幼少時に病気を患って聞こえにくく、右耳に頼って生きてきました。それがこの事故で、両耳共不自由になり、余程ショックだったのでしょう、部屋に閉じこもってしまいました。今までの祖母を知る人は以前のように普通に祖母に話し掛けます。しかし聞こえない祖母は反応しません。中には「無視された！」と怒鳴った人もいました。何度も聞き返す祖母に対して、眉間にしわを寄せる人もいました。祖母の横で私はそういう場面を幾度も目の当たりし、そういう態度をとる人々にとても腹立たしく思いました。それから祖母は「普通でなくなってしまった」が口ぐせになり、今まで見た事ない位に落ち込む姿に家族の誰も声を掛けれませんでした。しかし、母が意を決して祖母に言いました。「世の中には沢山障害を持っている人がいる。幸せそうに見える人、普通と思っている人の中にも悩みやコンプレックスを抱えている人がいる。でもそれに向き合って生きている人を沢山見てきた。自分を受け入れて上手に付き合ったら絶対今までより人生が楽

しくなるよ」と。強い口調でしたが、少し泣いていました。実は、母は市の社会福祉協議会に勤めています。身体障害者協会の事務も担当しています。だから母は、障害を持った老若男女の人達が、それぞれに生き甲斐を見つけて一生懸命に生きている姿を毎日のように見ているようです。同じ人間、自分の考え方一つ。たった一度の人生だから祖母に活き活き生きてほしいと私に話しました。次の日から祖母は変わったように見えました。弱音を吐く祖母とはまるで違います。正しく言えば、交通事故に遭う前の祖母はとても社交的でしたので、元の祖母になったという事です。聞き直して眉間にしわを寄せても、めげずに笑顔で話します。ノートと鉛筆を片手に筆談おしゃべりを始めました。交通事故で通院していますが、リハビリや診察の待ち時間は、同じく診察を待つ患者さんに話し掛け、友達を作り始めました。最近は私が学校から帰ると、病院の友の話ばかりです。母に身体障害者協会の入会方法や活動について詳しく尋ねているようです。祖母の口から「普通でない」の言葉も聞かなくなりました。今では「普通でないと自分のものさしで計り悪い方へ思い込んでいた。今思えば恥ずかしい」と言います。私の家のどんよりした空気が、真夏のように明るくなりました。私がこの二、三ヶ月の祖母を見て思ったのは、耳が聞こえなくなったショックよりも周りの態度や対応に疎外感を強く感じ、一番心が傷付いてしまったようでした。電話で何度も聞き直す祖母に苛立ち、相手から途中で切られた事もありましたし、聞こえないから会話にならないと、段々お出掛けの誘いも少なくなり、祖母が落ち込むのも無理ないと思いました。でもその反対に「田中さんとは、ずっと友達だからね」と言って下さる友達も何人もいて本当の友達を見つけ、祖母の心の支えになっています。傷付けた

り、支えたり、同じ人間なのに本当に不思議です。私も人間ですが、人を支えてあげる人間でありたいと思います。祖母が傷付く姿を見てきたのもありますが、困った人に、手助けをすると、共通して、「有難う」「助かった」の言葉と、嬉しそうな笑顔を私にくれます。その度に私は何とも言えない温かい気持ちになるからです。だから、他人の為にも自分自身の為にも、優しさの強い人間になりたいです。祖母は元の祖母に戻ったと言いましたが、以前より、パワフルで前向きになり、何より優しくなったと思います。それはきっと、自分の耳が聞こえなくなり、弱い立場に立ち、そういう人が、どんなに苦しんで努力しているか実感し、深く考えたのだと思います。祖母は交通事故に遭いましたが、自分で新しい世界を見つける事が出来ました。私にとって今の祖母はとても輝いていて、尊敬すべき祖母です。今の祖母になれたのは、母の言葉や友達の言葉があったからだと思います。言葉は人の心を傷付けもするし、救いもします。言葉を発する時は受ける相手がどう思うかを十分に考慮しなければならないし、人が喜ぶプラスの言葉を掛けていくように心掛けたいと思います。一生懸命生きている人に対し、心ない言葉や態度はその人の人権を奪う事です。どうすればお互いを尊重し合える世の中になるか、難しい問題ですが、ちょっとした気遣いや、相手に対する思いやりの気持ちの一つ一つの積み重ねを、皆んな一人一人が行うと、優しさの温かいパワーが世界を包んでいくと思います。それに加えて誰かが誰かを傷付けそうになった時に、「やめて」と阻止する勇気を一人一人が持った時みんなが窮屈に感じない世の中になると思います。他人を変えるのはとても難しい事ですが、自分の考え方や行動を良く変える事は出来ます。まずは自分を磨くことが自分に出来る事だと思います。

奨励賞

自分と向き合うことの大切さ

佐世保市立山澄中学校　三年　前田彩葉

私は生まれつき両耳が聞こえない難聴障害者です。私は、小学生の時から健常者のみんなと過ごしてきました。周りの友達や先生方は私の障害のことを受け入れてくれたので、いじめられることはなく楽しく過ごすことができています。私は耳が聞こえないことで、「どうして私なんかが生まれてきたのだろう。」とか「耳が聞こえてたらよかったのに。」とか考えてしまったりつぶやくこともありました。しかし、こうやって楽しくみんなと過ごしていくうちに健常者の人々に障害について知ってもらうことの大切さに気づきました。

この世界では私と同じように障害や病気を持っている人々は他にもたくさんいる中で、いじめられている人は少なくないとニュースなどで聞くことがあります。

そこで、健常者の人が障害者に対してどのように思っているのか、不便を強いられている障害を持った人達はどのような思いでいるのかを知りたいと思うことがあります。様々な情報に触れると、障害者をい

じめている人は何も考えずに障害者は健常者より弱い、異質のものだと考えている人が多いことが分かりました。また、障害のことでいじめられていた障害者の気持ちを調べたり考えてみると自分の障害のことを受け入れられないという意見が多いと考えます。「みんなができることが、自分にはできない。」「健常者に自分と何か違うと思われたくない。」自分の障害のことを話せず、自分一人で苦しんだり困っていることに助けを求めることができないことで、自分の障害を認めたくない気持ちになり受け入れられないということなのではないでしょうか。

このことから、障害者へのいじめをなくすために必要なことについて考えました。

一つ目は、健常者の人々が相手が障害者だと気づいたら、その相手の障害について受け入れてあげること。そして、相手が困っていなさそうに見えたとしても、もしかしたら困っていることをがまんしているかもしれないので、声かけをしてあげたり、相手に適した配慮をしてあげることで、障害者はすごく助かるし喜びます。

二つ目は、障害者がすぐに自分を受け入れることは、そんなに簡単ではありません。私の経験では、少しでもいいから自分の良い所を見つけて「これが自分だ。」と認めることで自分を受け入れやすいです。

三つ目は、自分が持っている障害についてみんなに知ってもらうことです。私の場合、友達に、難聴障害について話すと初めて知ったそうです。難聴障害についてもっと知ろうとしてくれたり、「難聴障害の人の役に立つ言語聴覚士という仕事をしてあげたい。」と言ってくれる人もいます。従姉も、私の難聴障害に

影響を受け言語聴覚士になったのかもしれません。また、私の存在をみんなが知ってくれることで、その人自身の考え方や行動にも影響を及ぼすことができるのなら、私にも喜びがあります。だから、他の障害者がもし自分を受け入れられなくても誰かに伝えて、その障害を知ってもらえば力になろうとしてくれる方はいるはずです。力になろうとしてくれる方がいたら、障害者も「生きてよかった。」と思えます。

最後に難聴障害者の私が、他の障害者のためにできることや障害者のいじめや差別を減らすためにできることについて考えてみました。障害者でも健常者でも、できることやできないこと、苦手なこと得意なことは、人それぞれあるので、みんなで共有し合って助け合うことも大切なことだと思います。そして障害者へのいじめや差別を減らすために健常者が障害者について知り、助け合う思いやりを持ち、どんな理由があろうといじめないことを意識して生活してほしいです。障害者は自分を受け入れ、健常者に知ってもらうようにアピールしていき、誰もが安心して過ごせるような生活環境をつくっていくことを心がけていくことが大切です。

奨励賞

言葉に対する責任を

長与町立高田中学校　三年　村上貴哉

今や現代社会に欠かせない、私たちの日常生活に浸透しているインターネット。私も毎日ユーチューブやＳＮＳを利用しています。情報検索など非常に便利である一方、使い方によっては誰もが犯罪に巻き込まれる可能性があるなど、怖い一面もあります。なかでも顔の見えない誹謗中傷は、大きな社会問題となっています。「匿名だからいいや」とあまりにも軽い気持ちで発信してしまう。それが、人を死に追いやったり、その人の人生を変えてしまったりすることもあるのに、不用意で無自覚なコメントが後をたちません。匿名は、発信する側のプライバシーを守るものであり、人を傷つけるためのものではないことを、全ての利用者が、しっかり自覚するべきだと思います。

ネットの情報は全てが正しいものではありません。一つの言葉や情報をうのみにして、人を攻撃するのはおかしいです。私たちは、一つのニュースや情報について、その一面だけを見るのではなく、多角的に情報を収集し、自ら考え、判断して、自分の考えを持つべきだと思います。

その上で、言葉を発信するとなったら、発信者は自分の言葉に責任を持たなければなりません。誰もが利用できるツールであり、時に加害者にも被害者にもなりうるからこそ、匿名であっても、自分が発する言葉の重みを自覚するべきだと思います。

「言葉の重み」ということを考えていたとき、小学生のときは加害者に、中学生では被害者になったという体験を思い出しました。

小学生のとき、自分と性格が合わないと感じていたある友だちがいました。私がその友だちに対して何気なく発した一言から、周りの友だちも巻き込むようなトラブルに発展してしまったのです。結果、その子が周りから仲間外れになってしまうという最悪の結果となり、私はその友だちをすごく傷つけてしまいました。

中学生になって、今度は逆の立場を経験することになったのです。私が友だちにアドバイスをするつもりで発した言葉を、相手が気に入らなかったというほんのささいなできことがきっかけでした。このことが理由で、仲の良かった友だちから仲間外れにされました。自分の言動を振り返り、気をつけて行動するようになって仲直りしてからも、友だちと微妙な距離感を感じる時期が続き、とてもつらかったです。家族や他の友人に支えられて乗り越えることができたけれど、自分の言動から仲間外れにされる側になって初めて、仲間外れにされた側のつらさ、悲しさを思い知りました。

「いじめをした側はすぐに忘れてしまう。でも、された側はずっと忘れない。」

こんな言葉をよく耳にしていましたが、自分の体験から本当にその通りだと思いました。あのつらかったときを思い出すと、一人になる怖さや、下を向くと出てきた涙の感覚が鮮明によみがえってくるからです。そして、何気なく発した言葉でも、相手の受け取り方によって意味が全く変わってくるのだということを思い知りました。

今、私は、自分がしてしまった過去を反省し、当たり前のことですが、「悪口ととられかねない言葉を軽々しく発することをしない」ということに、日々気をつけて生活しています。私にはこの、人として当たり前のことができていなかったのだと思います。二つの体験を通して、ようやくそのことに気づくことができました。

私たちは一人ひとり違う性格や個性を持っているのだから、考え方や物ごとの受け取り方が違うのは当たり前です。言葉を受け取る側も、その違いの部分を、「悪口」ではなく「意見」として互いにとらえることができれば、大きなトラブルにならないのではないかと思います。しかしいくら気をつけていても小さなすれ違いが起こったり、ぶつかってしまったりする場面はあると思います。そうなったときには、そのときに感じた気持ちを互いに「自分に向けて」考えてみればいいのではないかと思います。つまり、互いに「相手の立場になって考える」ということです。これも当たり前のことですが、私たちができそうでできないことではないでしょうか。相手の気持ちを想像することで、人を傷つける言動は無くなると思います。それでも攻撃を受けて傷ついてしまった場合は、決して一人で抱え込まずに助けを求めてほしいと思

います。

もう一度考えてみてください。私たちは、言葉一つで人を傷つけたり相手を追い詰めたりできるという事実を忘れてはいけません。一人ひとりが「言葉の重み」を自覚し、自分の言葉に責任を持つことが大切だと私は思います。

奨励賞

公平な社会を目指して

五島市立翁頭中学校　三年　餌網代　祥子

『人権とは』と問われた時、あなたなら、どう答えますか？

夏、私は幼い頃から母に連れられて、手話サークルの方がされている公民館講座の『子ども手話教室』へ通っていました。

今年の夏休みも、家族で参加させてもらいました。指文字や挨拶表現を習って、グループに分かれ、手話で自己紹介をします。挨拶と名前の表現は、もうお手のものです。今回のグループは、皆、慣れたメンバーだったので、名前だけでなく、趣味や好きな食べ物についても、手話でお話しました。そんな中、今年初めて知った表現があります。それは『志村けん』さんです。手話クイズの時、『アイーン』とされて、思わずみんなから笑いが起こると同時に、

「わかったー！」

という、男の子の元気な声があがりました。その声とともに、何人も挙手し、当てられた子が自信満々に

正解の答えを発表していました。正解を受けて、両手を掲げキラキラと手を振る仕草をする、出題したろうあ者の方も笑顔です。この、キラキラと手を振る仕草はろうあ者の方の拍手です。

このようなやりとりを見て、ふと、人権について疑問を持つようになったのです。

手話は、言葉を発せない方の言語です。しかし、それを全ての人が使える訳ではありません。ですが、それはどの言語においても同じです。

今は、どんな言語でも、ポケトークやスマホの翻訳機能で、おおむねコミュニケーションがとれるようになっています。

では、手話はどうでしょう。手話は無音なので、音声認識はできません。しかし、ドラマ『サイレント』では、文字起こしアプリを使い、健聴者の言葉をアプリが文字変換してろうあ者がそれを読むことで、コミュニケーションが取りやすくなるというシーンが出てきました。ただ、これも、しっかり教育を受け、文字を読み書きできる人だけが使えるツールです。

しかし、過去と比べると間違いなく、全く伝わらない、伝えられないというようなコミュニケーションの障壁は緩和されているのではないでしょうか。

ある時、手話教室の休憩時間に、

「大きくなったねえ。」

と数人で声をかけてくださった方がいました。その後、手話で手裏剣を飛ばすように手をこすり合わせて、

ニコニコしていました。私は『大きくなった』は、何となく分かったのですが、手裏剣の仕草は何のことか分からず、母の方を向くと

「ええええ！」

と言いながら、手裏剣を飛ばす仕草をして、さらに片手で拝むような手をして、顎を二回叩き、笑っていました。そしてその後、『ありがとう』の手話をしました。それから、私の方を向いて

「きれいになったって！」

と言いました。なんと『きれい』とほめてくださっていたのです。私も慌てて『ありがとう』と手話で伝えました。何気ないやり取りですが、近所のおばさん達とするようなやり取りをしたことがとても嬉しいと感じました。

〝障がい者〟と言っても様々な障害があります。それらはひと目でわかるようなものばかりではありません。聴覚障害も、見て分かりにくい障害の一つです。補聴器をしている方も居ますが、していない方もいます。足の障害も、車イスだと分かりやすいですが、義足だと座っておられると気付き難いです。

しかし、様々な障害があっても、スロープや点字など世の中はこれまで用途に合わせて様々な工夫がされてきました。

十二月十日は、国連が定めた人権デーです。日本ではこの日を最終日として一週間を人権週間としています。そして、一九七五年十二月九日は、国連総会で障害者の権利宣言が採択された日です。来年は、そ

れから五十年を迎えます。障害者の権利は広く認められてきていると思います。

冒頭の『人権とは』との問いの答えに『全ての人に平等にあるべきもの』という意見がありました。私はそれに賛成できません。全ての人が平等ではないからです。

以前、『平等と公平の違い』というショート動画を見ました。平等は、みんなが同じものを同じだけ与えられること。公平は各々に合わせて必要なだけ与えられることだそうです。私はこれを知り、妙に納得しました。

人権は平等に保証されるのが良いと思います。ですが与えられる権利は平等でなくても良いのです。障害者の人権を守るためには社会全体で協働し理解を深め、より良い環境を創る事が大切だと思います。そのために私は、障害に興味を持ち学んでいきたいと思います。

「第四十三回全国中学生人権作文コンテスト長崎県大会」入賞作品一覧

最優秀賞

◆長崎地方法務局長賞（中央大会推薦）
飛び込み台に立つ　長崎市立淵中学校　二年　神門　みなみ

◆長崎県人権擁護委員連合会長賞（中央大会推薦）
チャレンジャー　佐世保市立相浦中学校　一年　中山　彰乃

優秀賞

◆長崎県教育委員会教育長賞
普通とは誰が決めるの？　島原市立第一中学校　三年　吉田　ななみ

◆長崎新聞社賞
「いじり」から「いじめ」　対馬市立雞知中学校　二年　洲河　芽依

◆ＮＨＫ長崎放送局賞
「私にとって最高のお兄ちゃん」　松浦市立今福中学校　一年　田中　愛琉

◆ＮＢＣ長崎放送賞
「弟」　佐世保市立清水中学校　一年　高稲　咲夏

◆ＫＴＮテレビ長崎賞
私たちが生きる世界を作るのは　雲仙市立愛野中学校　三年　林田　恋実

◆ＮＣＣ長崎文化放送賞
幸せに生きる　壱岐市立石田中学校　二年　田中　海凪

◆ＮＩＢ長崎国際テレビ賞
魔法の耳と生きる　島原市立第一中学校　三年　森田　菜々子

◆エフエム長崎賞
「祖母が身体障害者になって気付かされたこと」　南島原市立有家中学校　一年　田中　きいら

◆長崎県校長会賞
好きなものは　対馬市立西部中学校　三年　阿比留　莉奈

奨励賞

自分と向き合うことの大切さ　佐世保市立山澄中学校　三年　前田　彩葉
言葉に対する責任を　長与町立高田中学校　三年　村上　貴哉
公平な社会を目指して　五島市立翁頭中学校　三年　餌網代　祥子

講評

第四十三回全国中学生人権作文コンテスト長崎県大会

長崎県教育庁義務教育課　指導主事　小崎記子

第四十三回全国中学生人権作文コンテスト長崎県大会において、県内一四七校、一五、八八八編に及ぶ応募作品の中から、見事に入賞されたみなさん、おめでとうございます。一人一人の思いがこめられた作文に、たいへん感動し、心が揺さぶられました。少しずつではありますが、みなさんの作品について感じたことをお話しします。

長崎地方法務局長賞を受賞された長崎市立淵中学校の神門みなみさんは、「飛び込み台に立つ」と題して、周りの支えに気付くことで、自身の辛い経験を乗り越えることができたことを綴っていました。

心も体も頑張りすぎていたときに、周りの方がかけてくれた温かな言葉はみなみさんの心の中でずっと生き続けていくことでしょう。ありのままの自分を受け止め、周りに頼る勇気をもつことの大切さに気付

いたみなみさん。誰もが自分らしく輝ける社会を創っていきたいと勇気をもって新しい世界に飛び込もうとしているみなみさんを全力で応援したい。一緒に誰もが輝く社会を創っていきたい、そう思える作品でした。

長崎県人権擁護委員連合会長賞を受賞された佐世保市立相浦中学校の中山彰乃さんは、「チャレンジャー」と題して、「障がい者」は、弱者ではなく、挑戦者なのだということを綴っていました。

彰乃さんの日常生活における気付きから伝えてくれた「チャレンジャー」という表現は、障がいのある人に対する見方だけでなく、社会の見方を大きく変える素敵な表現だと感じました。彰乃さんの作文は、互いを認め合い、尊重し合う社会には、社会を変えようと挑戦し続けることが大切であることを教えくれた作品でした。

長崎県教育委員会教育長賞を受賞された島原市立第一中学校の吉田ななみさんは、「普通とはだれが決めるの？」と題して、「普通」という表現に対する疑問を綴っていました。

「普通」と「十人十色」を対比させ、「人には長所もあり短所もある、考え方や見た目も違って当然だ」と訴えかけるななみさんの考え方が、一人一人が尊重される未来につながっていくのだと思います。「普通って誰が決めるの？」その答えは私たちの心の中にある。ななみさんの力強い問いかけに、当たり前と

思っていた価値観が揺さぶられる作品でした。

ＮＨＫ長崎放送局賞を受賞された松浦市立今福中学校の田中愛琉さんは、「私にとって最高のお兄ちゃん」と題して、お兄さんと過ごす中で出会った特別支援学校の先生方の取組について綴っていました。

障がいがある・なしに関わらず、特別扱いをせずに一人の「人」として接することがどれだけ尊いことなのか、愛琉さんの経験に基づいた思いがひしひしと伝わってきます。お兄さんのことを負担に思ったことも恥ずかしいと思ったこともないと力強く言える愛琉さんは、強い心の人に育っていると感じました。偏見や差別を許さない強い心の持ち主があたたかい社会をつくるということを教えてくれた作品でした。

ＮＢＣ長崎放送賞を受賞された佐世保市立清水中学校の高稲咲夏さんは、「弟」と題して、「男だから」などの無意識の中にある偏見や差別を相互理解によってなくしていきたいということについて綴っていました。

知らないということで恐怖心を抱いてしまう人間の心理を捉え、相手の生き方や考え方を理解しようとすることの大切さに気付いた咲夏さん。色々な角度で人を見て、分かり合おうと努力し続ける、咲夏さんのその姿勢から「必ず私たちは愛で差別を終わらせることができる」という思いを力強く伝えてくれた作品でした。

ＫＴＮテレビ長崎賞を受賞された雲仙市立愛野中学校の林田恋実さんは、「私たちが生きる世界を作るのは」と題して、本当の「豊かさ」とは何なのか、道徳の授業から生まれた問いに、世界で起きた問題や戦争に目を向けながら考えたことについて綴っていました。

戦争という最大の人権侵害を受けながら懸命に生きる子供たちと日本の子供たちを比較する中で、人権問題を「誰か」のことではなく自分事として学び続けること、この学び続ける中で育まれる周りを思う気持ちが世界を作っていくことに気付いた恋実さん。明るい世界は、人と人が愛し合うことで作られること、この先の未来にもそれをつなげていくことが大切であることを教えてくれた作品でした。

ＮＣＣ長崎文化放送賞を受賞された壱岐市立石田中学校の田中海凪さんは、「幸せに生きる」と題して、入院した際の出会いを基に、一人ひとりの生きる権利について綴っていました。

すべての人には平等に命があり、自分らしく生きる権利があります。一番幸せだと思う生き方を選べるように、小さな可能性も諦めないことの大切さを、海凪さんは学びました。互いが納得できる考え方や生き方を見つけることが、自分だけでなく周りの人の幸せにもつながるということに気付いた海凪さん。幸せに生きるということの尊さについて経験を踏まえて伝えてくれた作品でした。

ＮＩＢ長崎国際テレビ賞を受賞された島原市立第一中学校の森田菜々子さんは、「魔法の耳と生きる」と題して、人との関わりの中で感じた人間関係への不安や自分の耳と向き合って生きることについて綴られていました。

「魔法の耳」のことを人に打ち明けることはとても勇気が必要だったと思います。しかし、お母さんの支えにより一歩踏み出した菜々子さん。自分だからこそできる人との関り方を追求し、多様なニーズをもつ人の心の声を聞いて寄り添える人になりたいという決意を感じさせる作品でした。

エフエム長崎賞を受賞された南島原市立有家中学校の田中きいらさんは、「祖母が身体障害者になって気付かされたこと」と題して、交通事故に遭ったおばあさまが自分の身体と向き合い、力強く生きていく姿について綴られていました。

おばあさまを励ます温かな声掛けが、落ち込んでいたおばあさまの人生を明るく前向きなものへと変えていったことから、プラスの言葉は、人に生きがいを与え、生きる希望となることに気付いたきいらさん。自分を磨き、プラス思考で周りの人と関わっていくことの大切さを教えてくれた作品でした。

奨励賞を受賞された佐世保市立山澄中学校前田彩葉さんは、「自分と向き合うことの大切さ」と題して、自身の経験から障害者へのいじめをなくすために必要な三つのことについて綴っていました。

彩葉さんが提案する相手のことを受け入れること、自分らしさを認めること、障害のことを知ってもらうことの三つは、いじめをなくすためだけでなく、互いを尊重し合う社会を創っていく上で必要なことだと考えられます。すべての人に苦手なことや得意なことがあって、それを共有しながら助け合って生きていくことの大切さを教えてくれた作品でした。

奨励賞を受賞された長与町立高田中学校の村上貴哉さんは、「言葉に対する責任を」と題して、インターネットにおける人権侵害の実態から「言葉の重み」について考える大切さを綴っていました。

貴哉さんの実体験から、インターネット上で何気なく発した一言によって加害者にも被害者にもなり得る危険性に改めて気付かされました。発しようとする言葉を自分に向けたとき、受け取る側の気持ちが分かること、相手の立場になって考えることは、一人ひとりが言葉の重みについて考える機会になることを教えてくれた作品でした。

奨励賞を受賞された五島市立翁頭中学校の飯網代祥子さんは、「公平な社会を目指して」と題して、手話教室での出来事を基に、平等と公平の違いという視点から一人ひとりがもつ権利について綴っていました。

障害といっても、様々な障害があります。だからこそ、祥子さんが述べているように各々に合わせて必要な支援を受けられる「公平さ」が社会には必要なのかもしれません。互いに助け合いながら、社会全体

でより良い環境を作っていくことの大切さを教えてくれた作品でした。

最後になりましたが、身近な出来事をきっかけに、人権問題に気付き、自分にできることは何か、自分はどう生きていきたいのかということについて考え、実行しているみなさんの姿を目の当たりにし、たいへん嬉しく思っています。人権は、命をもつ一人一人に与えられた大切な権利です。みなさんの温かい思いや力強いメッセージは、きっと作文を読んでくださった方々の心を動かし、人権についての考えを深めるきっかけになるはずです。そして、みなさんの作文やこれからの行動でさらに多くの人々が幸せになれることを心から願っています。

人権の花運動

法務省では、昭和57年度から学校に配布した花の種子、球根などを、子どもたちが協力し育てることによって生命の尊さを実感し、その中で豊かな心を育み、優しさと思いやりの心を体得することを目的として、人権の花運動を行っています。

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

人権イメージキャラクター
人KENまもる君

また、活動を通じて感じた感想等をまとめた成果物について、公共施設やデパートで展示を行っています。

令和６年度実施校（長崎県内）

～ご協力ありがとうございました～

〇長崎協議会

長崎市立（愛宕小学校、香焼小学校、小島小学校、朝日小学校、山里小学校、西浦上小学校、高尾小学校、三重小学校、滑石小学校、大園小学校、北陽小学校）

長崎県立鶴南特別支援学校、長崎精道三川台小学校、長与町立長与小学校、時津町立鳴鼓小学校

〇諫早協議会
大村市立（大村小学校、中央小学校、竹松小学校、萱瀬小学校、黒木小学校）
諫早市立（本野小学校、長田小学校、上諫早小学校、小栗小学校、真崎小学校、喜々津東小学校、森山西小学校、高来西小学校、長里小学校）
雲仙市立（多比良小学校、土黒小学校、小浜小学校、北串小学校、南串第一小学校、南串第二小学校）

〇島原協議会
島原市立第五小学校
南島原市立（深江小学校、小林小学校、大野木場小学校）

〇佐世保協議会
佐世保市立（宮小学校、三川内小学校、早岐小学校、江上小学校、黒髪小学校、日宇小学校、木風小学校、白南風小学校、春日小学校、世知原小学校、吉井南小学校、小佐々小学校、猪調小学校、鹿町小学校）
西海市立（西彼北小学校、西海東小学校、大崎小学校）
東彼杵町立彼杵小学校、川棚町立川棚小学校、波佐見町立中央小学校
小値賀町立小値賀小学校大島分校、佐々町立佐々小学校
新上五島町立（奈良尾小学校、上郷小学校、北魚目小学校、有川小学校）

〇平戸協議会
平戸市立（平戸小学校、紐差小学校、度島小学校）
松浦市立（調川小学校、青島小学校）

〇壱岐協議会
壱岐市立（盈科小学校、那賀小学校、勝本小学校）

〇五島協議会
五島市立（福江小学校、本山小学校、玉之浦小学校）

〇対馬協議会
対馬市立（金田小学校、大船越小学校、比田勝小学校）

「第43回全国中学生人権作文コンテスト長崎県大会」応募数

応募学校数	147校（82.1％）
応 募 者 数	15,888人（46.0％）

■審査員（敬称略）

長崎地方法務局次長	佐藤　博文
長崎県人権擁護委員連合会会長	有田　洋史
長崎県人権擁護委員連合会 こども人権委員会委員長	佐野　浩子
株式会社長崎新聞社（論説委員会） 委員長	田渕　徹郎
長崎放送株式会社 取締役総務技術局長	真島　和博
株式会社長崎国際テレビ 取締役報道制作局長	野田　一紀
長崎市立深堀中学校校長	飯盛　千景

ひとりで悩まないで

こどもの人権SOS-eメール
https://www.jinken.go.jp/soudan/pc_CH/0101.html

こどもの人権110番
0120−007−110

こどもの人権SOSチャット
https://kodomochat.jinken.go.jp/browser_chat/jinken/users/sign_in

LINE じんけん相談
検索ID
@linejinkensoudan

全国共通人権相談ダイヤル
(みんなの人権110番)
全国共通ナビダイヤル
ゼロゼロみんなのひゃくとおばん
0570-003-110

常設相談所	長崎地方法務局人権擁護課	TEL	095(820)5982
	同　諫早支局	TEL	0957(22)0475
	同　島原支局	TEL	0957(62)2513
	同　佐世保支局	TEL	0956(24)4850
	同　平戸支局	TEL	0950(22)2263
	同　壱岐支局	TEL	0920(47)0164
	同　五島支局	TEL	0959(72)2261
	同　対馬支局	TEL	0920(52)6463
	月曜日～金曜日（休日を除く）午前８時30分～午後５時15分		

第43回全国中学生人権作文コンテスト
長 崎 県 大 会 作 品 集

令和７年１月発行
長崎地方法務局・長崎県人権擁護委員連合会

禁無断転載
※本作品集の作品を教材等に使用したい場合は、下記にご連絡下さい。
長崎地方法務局人権擁護課
電話(095)820−5982

人権イメージキャラクター
「人KENまもる君」
「人KENあゆみちゃん」